

【その他】

鳥居観音所蔵 水野梅暁関係写真史料の紹介

三重大学共通教育センター非常勤講師	広中 一成
東京都公文書館 専門員	長谷川 怜
元名古屋大学 大学文書資料室事務補佐員	松下 佐知子

はじめに

愛知大学東亜同文書院大学記念センターでは、東亜同文書院卒業生の活動を戦前の日中関係のなかに位置づける研究の一環として、2012年、「水野梅暁・藤井草宣研究プロジェクト」を立ち上げ、史料調査を開始した⁽¹⁾。

本稿編者のひとりである広中一成は、愛知大学大学院中国研究科在籍時より、藤井草宣についての史料の調査と研究を始めており、プロジェクトの立ち上げにも関わった。本稿の内容は日本近現代史にも範囲が及ぶため、同分野を専門とする長谷川怜と松下佐知子を編者に加えた。

本稿で取り上げる水野梅暁は1904年に東亜同文書院第一期生として卒業後、浄土真宗本願寺派僧侶として、日中の仏教交流に尽力する傍ら、中国問題のジャーナリストとして活躍した。

一方、藤井草宣は浄土真宗大谷派僧侶で、1925年に東京で開催された東亜仏教大会に水野の秘書として参加した。その後、水野の勧めで東亜同文書院に給費留学し、1943年に帰国するまでに、中支開教監督や北京別院輪番、日華仏教聯盟南京総会理事長などを務めた。

両者は東亜同文書院出身の僧侶という異色の経歴を持ち、かつ、卒業後も長く中国

で活躍し、仏教を介して日中関係に影響を与えたという点で、研究対象に充分値する。特に水野梅暁は数多くの史料を遺し、そのなかでも埼玉県飯能市名栗の鳥居観音にある800点近くに及ぶ写真史料からは、当時の水野の活動や人間関係をうかがい知ることができる。

鳥居観音は、埼玉銀行初代頭取や参議院議員などを務めた平沼彌太郎（雅号は桐江）によって建立された。約30ヘクタールに及ぶ敷地内には、シンボルの救世大観音や玄奘三蔵の遺骨を祀った、玄奘三蔵塔などがある⁽²⁾。

1931年、脳溢血で東京の麹町病院に入院した水野は、病状が回復すると、主治医の柳川華吉の妻須美子の実家であった名栗村の平沼家で静養した。これをきっかけに、水野と平沼との終生の交流が始まった⁽³⁾。

太平洋戦争末期、アメリカ軍の日本本土空襲が激しさを増すと、水野は平沼の提案で、東京麹町の自宅から家財道具と貴重品を運び出し、平沼家に疎開させた。そのなかには、水野が長年の活動のなかで中国の要人から贈られた数百点の書画や文献などがあつた⁽⁴⁾。現在、鳥居観音内の文庫に収蔵されている品々は、そのとき持ち込まれた物である。

調査した写真史料は、画像データ化した

うえで、関連史料を用いて整理し、来年度、写真集の刊行を予定している。

それに先立ち、本稿では鳥居観音の許可のもと、代表的な15点の写真史料を紹介する。

写真の選定にあたっては、まず「水野梅暁と中国革命」、「中国における水野梅暁の活動」、「水野梅暁と仏教」の3つのテーマを設定し、それぞれに関連する写真を本稿编者3人が数枚ずつ選び出し、あわせてキャプションを付した。

なお、本稿では写真史料以外に、一般社団法人尚友倶楽部のご厚意で、水野が大正時代末期に外務省亜細亜局文化事業部長の岡部長景に宛てた未公開書簡一点を掲載す

る。本書簡は水野が中国で具体的にどのような活動をしていたのかを示した貴重な一次史料である。

水野梅暁の写真史料の掲載に同意していただいた鳥居観音の川口泰斗氏、書簡史料を提供していただいた尚友倶楽部にこの場を借りて厚く御礼を申し上げる。

〈凡例〉

- ・写真タイトルは裏書き等によった。
- ・裏書き等の書き込みがない写真については編者がタイトルを付し、〈 〉をつけた。
- ・写真タイトルおよび関連史料の翻刻に際しては旧漢字を新字に改めた。



鳥居観音境内にある鳥居文庫の外観。



鳥居文庫内で展示されている写真。展示されている数十枚の写真以外に数百枚にのぼる写真が同文庫内に収められていた。これらの写真も全てケースから出した上で保存処理を行った。



持ち出しに際しての梱包作業の様子。



文庫内での梱包作業。一点ずつ薄葉で包んでいるところ。

水野梅暁略年表

年（和暦）	月日	数え年	事項
1877（明治10）年	1月2日	1歳	旧福山藩士の父金谷俊三と母マツの四男として広島県深安郡福山町で出生。幼名は善吉。
1882（明治15）年頃		6歳	広島県神石郡父木野村の曹洞宗長善寺住職、水野桂巖の従弟となって、姓を水野とした。水野桂巖のもとで出家。
1889（明治22）年頃		13歳	京都に出て、臨済宗大徳寺高桐院の高見祖厚のもとで修禅を始める。
1894（明治27）年		18歳	上京し、哲学館（現在の東洋大学）の夜学に通う。
1897（明治30）年	春	21歳	京都若王子で修禅中の根津一と知り合う。
1901（明治34）年	5月	25歳	東亜同文書院院長に就任した根津一の書生として、上海に渡る。
1902（明治35）年	8月	26歳	浙江省寧波の普陀山天童寺を参拝。
1903（明治36）年	春	27歳	湖南省長沙に赴き、笠雲和尚と会見。
1904（明治37）年	秋	28歳	根津一の計らいで東亜同文書院第一期生として卒業が認められる。 長沙に雲鶴軒を建設。
1905（明治38）年		29歳	長沙の開福寺内に僧学堂を開設。
1911（明治44）年		35歳	辛亥革命の長江戦場で臨時陸軍野戦病院を開設。
1916（大正5）年		40歳	東京芝の青松寺で開かれた黄興追悼会に参加。
1921（大正10）年		45歳	東方通信社調査部長に就任。
1924（大正13）年	7月	48歳	江西省廬山に開かれた世界仏教大会に講師として参加。 支那時報社を創設。『支那時報』を発行。
	10月		
1925（大正14）年	11月1日	49歳	東亜仏教大会に委員として参加。
1926（大正15）年	10月1日	50歳	日本仏教徒訪華視察団に随行。
1931（昭和6）年		55歳	脳溢血で東京の麹町病院に入院。退院後、埼玉県入間郡名栗村の平沼弥太郎家で静養。
1933（昭和8）年	10月	57歳	日満文化協会設立に参加。
1937（昭和12）年	11月	61歳	東洋大学科外特別講座の満洲講座で宗教事情の講師を務める。
1942（昭和17）年		66歳	『支那時報』廃刊。その後、東洋大学で教鞭をとる。
1949（昭和24）年	10月	73歳	日泰寺仏舎利奉迎50周年記念式典に参加。 埼玉県岩槻市（現在のさいたま市岩槻区）の慈恩寺で死去。
	12月21日		



写真 01：〈洋装姿の水野梅暁〉
水野梅暁の肖像写真。風貌から晩年に撮影されたものと推定される。



参考画像 『支那時報』
水野が1924（大正13）年に創刊した雑誌で、日本の対中政策や時事問題をはじめとする評論が掲載されている。

【水野梅暁と中国革命】

明治30年代に初めて中国に渡った水野は、仏教の布教活動の傍ら中国革命に関わった人びとと交流した。水野と親しくした中国側の代表的な人物に孫文や黄興、日本側では頭山満、梅屋庄吉、宮崎滔天などがいた。鳥居観音には水野がこれらの人物と共に撮影した記念写真の他、彼らが直接水野に寄贈し写真が多数存在する。



写真 02：〈水野、頭山満ほか集合写真〉
前列左から水野梅暁、犬養毅、頭山満、萱野長知、犬養と頭山の後ろに立つのが中華留日基督教青年会総幹事の馬伯援。水野は彼らと中国革命人士への支援を行なった。1930（昭和5）年1月から3月にかけて、馬は孫文の伝記を編纂するための史料を集めるため、孫文と係わりの深かった彼らを集めて、5回にわたって座談会を催した。



写真 03：〈宮崎滔天〉

1871（明治3）年、肥後荒尾村生まれ。本名は寅蔵。孫文らと意気投合し、中国での革命活動に尽力した。萱野長知らと『革命評論』を発刊し、中華革命同盟会機関紙『民報』を援護、中国同盟会の分裂の危機を救った。

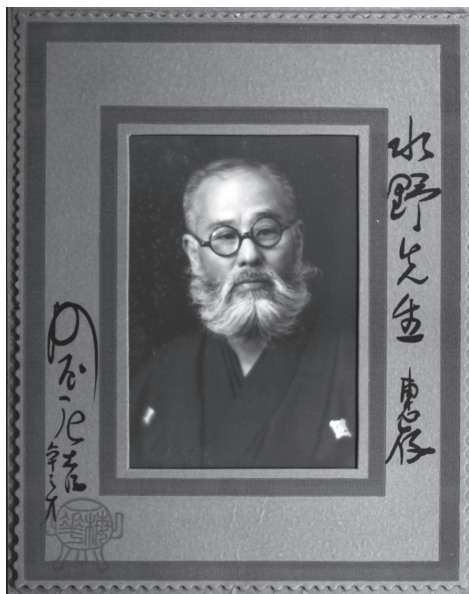


写真 04：〈梅屋庄吉〉

映画作成会社Mパター商会創設者。1912（大正元）年、当時あった映画会社を合併させて、日本活動写真会社を設立した。中華革命同盟会機関紙『民報』に出資し、孫文に対して活動費や武器などを提供した。

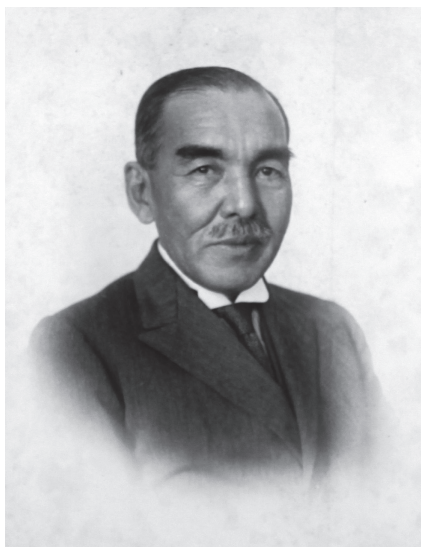


写真 05：〈伊集院彦吉〉

1864（元治元）年、鹿児島生まれ。大久保利通の娘婿。東亜同文会副会長。外務官僚として将来を囑望されたが、本人の希望で当時のエリートコースではなかったアジア在勤に進んだ。1920（大正9）年、新設された外務省情報部長に就任。このとき、水野梅暎を外務省外郭団体、東方通信社の調査部長に招聘した。



写真 06：中華民国大總統 孫文博士

写真台紙に「中華民国大總統 孫文博士」の書込みがある。孫文本人から水野が贈られたものと思われる。



写真 07：黄興追悼会 於青松寺

1916（大正 5）年 10 月 31 日、上海で逝去した黄興を慰霊するため、同年 11 月 17 日、東京芝の青松寺で後藤新平ら日本各界代表が発起人となって、黄興追悼大会が開かれた。会場には数千人の弔問客が訪れ、会場内に入りきれなかった群衆が数万人に及んだ。写真台紙に「昭和四年十二月」の書き込みがあるが誤記であろう。

【中国における水野梅暁の活動】

中国革命の後も、水野の中国との関わりは続いた。水野は日本と中国を幾度も往復し、中国側要人との関係を深めた。また、水野は頭山満や犬養毅といったアジア主義者たちの活動にも様々な形で関わると同時に、外務省による対支文化事業においては代表者である岡部長景と密に連絡を取り情報提供を行っていた。残された写真から、水野の広範な活動の一端を垣間見ることができる。



写真 08：〈林出賢次郎〉

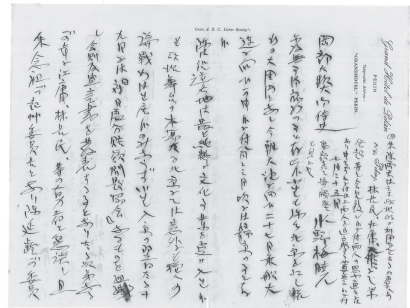
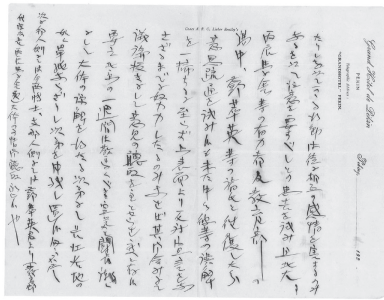
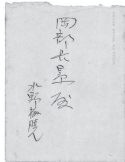
1882（明治 15）年、和歌山県生まれ。東亜同文書院第二期生。明治～昭和の外務官僚。満洲国が「建国」されると満洲国執政府の行走（溥儀の秘書官）となった。戦後は泉岳寺に観音堂を寄進するなど仏教への信仰が篤かった。本写真の台紙には「水野道兄 惠存 丁丑初冬 訪賢敬贈」の書き込みがあり、1937（昭和 12）年に林出から水野に直接贈られたものであることが分かる。林出は満洲国の官服をまとい写真に収まっている。なお、写真表紙には水野によると思われる「満洲国侍従長 林出賢次郎」の記載があるが、正式な役職名ではなく、林出が溥儀の通訳として側仕えをしていたことから侍従長としたものである。



写真9：(塘沽における水野、岡部長景ほか) 塘沽にあった在郷軍人会分会の建物前で撮影。撮影は1942年9月12日。前列左から2人目より岡部長景、酒井忠正、水野梅暁。岡部長景は外務官僚・貴族院議員を務めた人物で、支支文化事業部長として中国との深い関わりを持っていた。水野との間には書翰のやり取りも確認される。酒井忠正は貴族院副議長や農林大臣を務めた政治家。岡部、酒井は共に研究会所属議員である。本写真の撮影された背景や水野らがこの時に中国に滞在していた理由は詳らかでないが、この年に外務省文化事業部が廃止されていることと彼らの中国行は関連していると推定される。

***関連史料：「岡部長景宛 水野梅暁書簡」（大正末か）**

本史料は、長らく岡部家に保存され、現在は一般社団法人尚友倶楽部が保管する岡部長景関係文書に含まれている。これまで未公開であった書簡を今回特別にご提供頂いた。書簡が書かれた時期は不明ながら、本文に登場する人物の没年等から大正末頃と推定される。この時岡部は亜細亜局文化事業部長を務めており、書簡の内容から両者の間で様々な情報のやり取りがあったことが分かる。



七月二十五日
岡部大契御侍史 水野梅暁
午後無事御旅行の事と存被候。小生も亦々北京を以て旅行の大団円となし今朝天津に向ひ二十七日乗船大連に向ひ可申候に付八月三日頃には帰京の事と存候。

陳は治道各地は最も純粹に文化事業を受け入れ候も政治舞台の本場たる北京にては意外にも種々の論戦行はれ居候のみならず小生入京の翌日もの十九日には『対日処分賠償問題協会』なるものを組織し会則及宣言書を発表する事となりたる次第なるが幸に江庸、林長民、等の有力者と懇談し且朱念祖が起草委員長となり陳延齡が委員たりしを以てかゝる行動は徒に相互の感情を害するのみなるを以て注意を要すべしとの忠告を試み且北大丙辰学舎等の有力者及教育部の楊中、懿萃英等の諸氏と往復し大分意思疏通を試み候も未だ中々彼等の誤解を一掃するに至らず上表面より反対宣言をなさざるまでに努力したるのみなれば其御含みにて議論抜きにして意見の聴取を主とせられ度と存候。要之北京の一週間は驚くべき空気に闘ひ漸くにして大体の諒解を得たる次第にて長江各地の如く單純ならざりし次第を申残し置候。忽々不尽次に邦人側にては今西將士、支那人側にては懿萃英君より(教育部代理次長丙辰学舎員) 大体の事情御聴取不被候也。

◎朱陳両君は之を政治的に利用せんとするの虞あるも林長民、江庸、天津にて榮談起等と会見致し候に付兩人の思ふ通りにはなり申さず候に付此上兩人を追窮する必要無之候に付温顔を以て接触致され度候也。

◎朱陳両君は之を政治的に利用せんとするの虞あるも林長民、江庸、天津にて榮

【水野梅暁と仏教】

水野梅暁は仏教を通じた日中の提携を模索し続けた。青年僧侶時代、中国へ向かう直前に撮影された写真や、大正期に力を注いで実現させた東亜仏教大会の様子や日本仏教団の訪中時の写真からは仏教者としての水野の姿を知ることができる。本項では、水野の足取りの一部を伝えるために、1926（大正15）年の仏教団訪中のルートの地図やそれを記録した書籍『日本仏教徒訪華要録』なども掲載する。



写真 10：明治二十七年七月 入湖開学前於青松寺記念撮影

東京市芝区（現東京都港区）にある青松寺（曹洞宗）の中雀門前で撮影された写真。前列左から2人目が水野梅暁。門には日章旗（右）と清国国旗（左）が交叉して掲げられており、梅暁の湖南留学を記念して青松寺で会合等が開かれた折に撮影されたものと思われる。ただし、水野が長期で湖南省に赴くのは1905（明治38）年であり、裏書の「二十七年」は三十八年の誤記であろう。



写真 11：〈幽冥鐘前での王一亭・水野梅暁ら記念写真〉

「幽冥鐘」と名づけられたこの梵鐘は、関東大震災における犠牲者の慰霊のために中国仏教徒から寄贈された。義捐金募集および梵鐘鑄造の中心的人物となったのが、能書家としても知られる上海出身の実業家・王一亭である。梵鐘は1925（大正14）年10月に日本に到着し、震災において最も多数の死者を出した両国の被服廠跡に安置された。鐘は仏教聯合会から東京市へ引き渡すという形をとっており、水野はその仲介を務めたと思われる。本写真は、梵鐘到着直後に撮影されたものであろう。左から2人目が水野、3人目が王一亭。



写真 12：〈東亜仏教大会〉

東亜仏教大会期間中の 1925（大正 14）年 11 月 11 日、京都市公会堂で公開講演会が開かれた。演壇に立っているのは中華仏教代表の太虚、その横にいるのは通訳の水野梅暁。このとき、会場には池田宏京都府知事、橋本独山臨濟宗相国寺派管長など、京都各界の代表者らが詰めかけた。



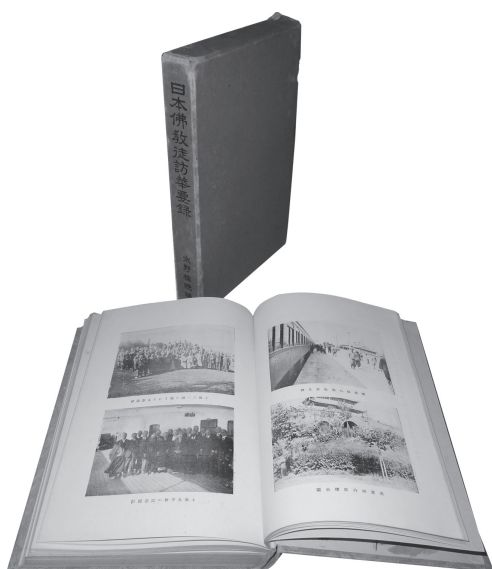
写真 13：〈上海 静安寺における記念撮影〉

1926（大正 15）年に行われた仏教団訪中の際に上海の静安寺で撮影された記念写真。同寺では 1912 年に中国仏教総会創設の会合が行われており、中国仏教の中でも中心的な役割を持つ寺院であったといえる。やや右寄りの最前列で黙想して写るのが上海の実業家・王一亭。その右が水野梅暁。



日本仏教団の中国訪問マップ

1926（大正15）年に行われた仏教団訪中のルート、『日本仏教徒訪華要録』より作成。京都を発した一行は下関を経て釜山から大陸に入り、朝鮮半島を北上、鴨緑江を越えて満洲へ達した。満洲ではその中心地である奉天に立ち寄り、その後は長城を越えて華北～華南へ向かっている。中国南部での寺院訪問や要人との会見がこの訪中のハイライトであり、王一亭をはじめとする多くの人士との交流を行っている。この訪中については記録集である『日本仏教徒訪華要録』が出版されているほか、写真も数多く残されている。その中には、本稿では紹介しなかったが、中国の写真館が寺院に向いて撮影した長大なパノラマ写真も存在する。



参考画像 『日本仏教徒訪華要録』



参考画像 中華仏教聯合会から参加者に贈られた仏画（『日本仏教徒訪華要録』所収）

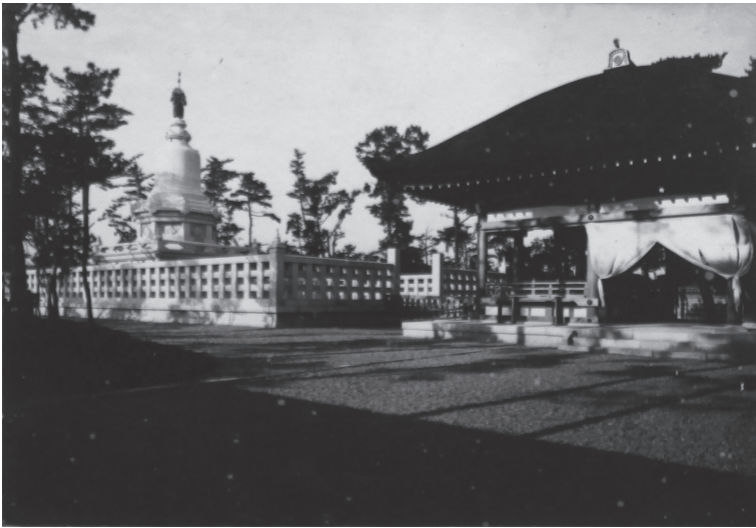


写真 14、15:〈日泰寺奉安塔と仮本堂〉
名古屋覚王山の日泰寺（創建時の名は日暹寺）の奉安塔（上）と仮本堂（下）。いずれも1918（大正7）年に撮影。日泰寺は1900（明治33）年、シャム（暹羅：現在のタイ）から贈られた仏舎利を安置し、日本とシャムの友好を記念するため1904年に創建された。覚王山の覚王とは釈尊の号に由来する。1949（昭和24）年10月、日泰寺仏舎利奉迎50周年を記念して、仏舎利と戦前に中国から日本に贈られた玄奘三蔵の遺骨との「対面」が行われた。このとき、玄奘三蔵の遺骨は水野梅暁とともに、東山動物園の象の背に乗せられ、多くの人々に見守られながら、日泰寺に運ばれた。



(1) 調査の詳細は、「水野梅暁と藤井草宣に関する史料の調査と整理について」、『愛知大学国際問題研究所紀要』（愛知大学国際問題研究所、2015年5月掲載予定）を参照。

(2) 「鳥居観音概要」、白雲山鳥居観音ホームページ (<http://www.toriikannon.org/info/index.html>)、2015年1月11日閲覧。

(3) 島田知明編『鳥居観音と平沼彌太郎』、プレス、1971年、66頁。

(4) 同上、67～68頁。